

# 他では類を見ない石元泰博の作品と資料類

シャガールと並ぶ高知県立美術館のコレクションとして、写真家・石元泰博（1921〜2012）の作品群が挙げられる。石元の写真作品

3万4753点、さらには愛用品など関連資料を含めた一大コレクションだ。これらは全て石元本人と遺族から寄贈された。

2014年、高知県は、高知県立美術館に大規模なコレクションの管理、研究、普及活動をおこなう石元泰博フォトセンターを開設。館2階に約85㎡の石元作品専用の常設展示室を開室し、年に6回石元泰博コレクション展を開催している。



上／石元泰博展示室には作品の他、自宅リビングで愛用していた家具類も展示されている。  
右／石元泰博《セルフ・ポートレート》1975年 ©高知県、石元泰博フォトセンター

米国サンフランシスコに生まれた石元は、3歳の時に両親の故郷である高知に戻り、高校卒業後に単身渡米。すぐに太平洋戦争が始まったために収容所生活を経験し、1948（昭和23）年には通称ニュー・パウハウスでデザインや写真技法を学び、1952（昭和27）年イリノイ工科大学を卒業した。翌年来日すると、桂離宮に大きな感銘を受けて撮影。本格的に写真を始め。1969（昭和44）年に日本国籍を取得。写真界に大きな足跡を残し、1983（昭和58）年に紫綬褒章を受章した。1996（平成8）年には文化功労者にも選ばれている。



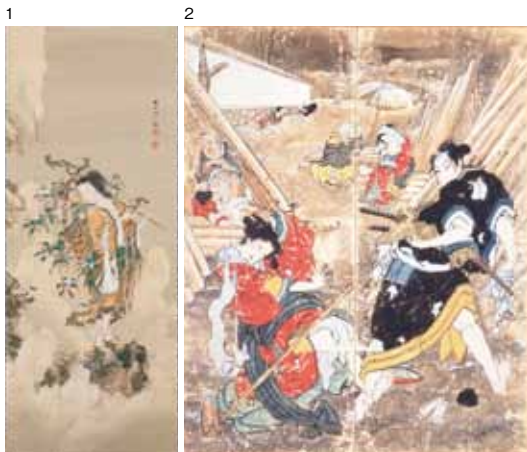
石元泰博《桂離宮》昭和五六・五七年 ©高知県、石元泰博フォトセンター

# 時代を超えた高知県ゆかりのコレクション群

「高知県立美術館建設構想」の美術資料の基本的な収集方針という項目に「県出身の作家の作品及び県に縁のある優れた作品」とあるように、この美術館では高知県にゆかりのある

作家の作品もコレクションしている。その代表作家として挙げられるのは、やはり絵金（弘瀬洞意）だろう。その作品は『図太平記実録代忠臣蔵』のほか45点。ただし、絵金本人のもの

だけでなく、絵金の弟子の作品など絵金の真筆と断定できない絵金派の作品が含まれている。あくまで「伝」の文字が付いているが、コレクションの中には、国沢



- ①河田小龍《西王母》 明治中期頃
- ②絵金《太平記忠臣講釈 七条河原惣嫁宿》 制作年不詳
- ③広瀬東畝《孔雀図》 1912年
- ④山本昇雲《双鶯競芳》 制作年不詳
- ⑤絵金《図太平記実録代忠臣蔵 十一段目 師直館討入》 制作年不詳
- ⑥石川寅治《眉をおとした少女》 1894年
- ⑦今西中通《みどりの静物》 1940年
- ⑧伝 国沢新九郎《春》 1871-74年
- ⑨中山高陽《李白鶴濯図》 制作年不詳